

特集「高齢社会を考える」

Feature: Thoughts on an Aging Society

連続公開講演会「高齢社会を考える」(第一回)

生老病死と仏教 三枝充恵

はじめに

「三枝でございます。ごくごくばらんじに判りやすい
砕けた調子でお話したいと存じます。」

といって始めたわたくしの拙いお喋り(日本青年館大講
堂、一九九七年十月八日)が録音され、再生され改めて文
章が整えられて手許に届き、数回、全文を読み返してか
ら字句や文体などに変更や修訂を加え補足や添削を施し

てはみたものの、とくに前半を占める個所が当日会場で
配布されたわたくしの略歴に沿っての一種の自伝めいた
もののみに終始しており、その内容はかなり個人的すぎ
て浅く薄く、活字化されて印刷に付すには相応しないこ
とをいまさら恥じ、そうかといって、本誌への寄稿を拒
ることもあまりにも身勝手であろうと畏れ、そのような
事情から、以下には、古希をとうに過ぎてすでに老に入
っているわたくしがこの二三年ほどのあいだあれこれ

考え思い浮かべて来たことがら(の一部)をいささかま
とまらぬままままに綴って行くことにしよう。

1

おおよそ紀元前十世紀を中心に古代インド人は着想し
描出したヴァラエティ豊かな神話をヴェーダ聖典に結晶
させ、前七世紀ごろには諸哲人が登場して古ウパニシャ
ッド哲学の誕生を迎え、ついには梵我一如という幽邃な
形而上学に収斂して凝結する。当時すでにカースト制度
が広く社会全般に浸透し瀰漫するなかで、上位を占める
バラモンの司祭者たちは祭祀の儀礼やその用具類などに
凝り独自の諸テクストを磨きあげる。

その間にインド大平原に進出し拡大し定着して成立し
た農村は、肥沃な土地・モンスーンと大河とによる大量
の水・ありあまる太陽熱に恵まれて豊かさを増大し飛躍
させ、それに伴う商業や小工業の隆盛が訪れると、村落
は都市へと発展して行つてますます人口を招き集め、そ
れを核とする群小国家が興りたがいに勢力を貯え覇権を
競い合う。

都市に住む人々のあいだにはすでに、ヴェーダに背を
向けてバラモンとその祭祀を軽蔑しあるいは無視し批判
し、思想の自由・発表の自由・生活の自由にもとづいて
自立し自説を實踐し、そのような自由思想家たちを刺戟
し助長し歓迎し帰依し擁護し尊敬する雰囲気漂い、思
想指導者と支持者たちや奉仕者たちから成る諸グループ
が形成されるなか、インドは紀元前六〜前五世紀の時代
へと懸る。そのころ他方に、先住民の土着文化との接
触・混血・融合も進行しつつける。

仏教はそのような社会状況のもと、バラモンの勢力圏
よりややや東方、ガンジス河中流域の東寄りの地に生まれ
育った。

東アジアの長い伝承には釈尊と称されてきた仏教の創
始者を、ゴータマ・ブッダと近・現代風の呼称に従う専
門家は、いま全世界にそして日本にも少なくない。それ
はイエス・キリスト(Jesus Christ)という西の伝統的な
呼びかたとの均衡には好都合ながら、他方で、キリスト
の語は複数化されない(ただしキリスト教諸派の一部には
「第二のキリスト」を偕称するケースも時にあらわれる)のに

対して、仏教はすでに最初期から後代までブッダの複数形（諸仏）がその諸文献にむしろノーマルであり、ブッダの異名（如来など）も数多く知られ、また大乘仏教には特定の名称のブッダが篤信されて今日にいたっており、いずれにしても、ブッダとキリストというそれぞれの語と二つの宗教とに関する基本的な差異は、最初に銘記する必要がある⁽¹⁾。以下の拙文では従来と同じく釈尊と呼ぶ。

釈尊のさとりと教説とは、上述したそれまでの諸思想・諸哲学とは全く異なっていた、そのことを一言に要約すればつぎのようになる。

仏教に先行し確固とされつつあった伝統思想にせよ、またほぼ同時代の諸自由思想にせよ、それらの視圈と観察と思弁とは自己の外部に向けられて（自己は実質的に被われ隠されていて行方不明となり）いわば宇宙の根原ないし世界の原理を求めている（自己に代わって自我がその原理に呼应しベアとなった）、そのようなありかたを一変し、むしろ逆転させて、釈尊はひたすら自己の内面へ、内なる自己へ、自己の奥底へ、こころのありのま

まへ、同時に、自己をとりまいて自己が直面している日常の現実へ、そのあからさまな具体的な一つ一つへと向かい踏み込み、そしてさとする。

あるいは右に類した急転回を、第二次世界大戦後のわたくしたちは直に^{じふ}膚に感じていた。すなわち、存在論や認識論の枠組に縛られ経験論や実在論や唯名論などのイズムの強制に^{せじ}縛られていた西洋哲学が、ほぼ第一次世界大戦を境にして一挙に、たとえばヨーロッパ大陸には世にいう実存哲学を暴発させて現象学とともに奔流をたぎらせ、英米には論理実証主義をモットーとする分析哲学（いまは科学哲学とも称する）を展開して急発進しており、（一時しばらくは平等を掲げて革命に酔う社会主義の幻想も栄え^{はげ}変ったが萎^しみ消えた）、文字どおり二極ないしは多極に分裂して、ただその啓蒙的な解説ばかりが横行し、そのなかでイデオロギー化して猛威を振り、ときに奇を衒って世の流行を誘^{いざな}う阿^あり阿^あり甘え、しかし足許を直視すれば、異常な科学技術のマニア的な偏執や、威嚇的な饒舌の反動による空洞化や、汚染され劣悪化しかけた緊

急の環境などに脅かされて、ようやく地球上の人々がそれぞれに地道に独自の自己を築きながら併存し相互の理解と協力とに努め励むという現実を意識し自覚している。

*

釈尊をとらえあるいは釈尊がとらえたテーマは、何よりもまず、まさに「生老病死」という「いまここにいるこのわたくしの最も自明な同時に切実なことがら」であったと、わたくしは考える。

そして釈尊は「生老病死」を、広くよく知られているように、「生苦と老苦と病苦と死苦」と説き「苦」として押える。ここにいう「苦」とは（これまでの拙稿や拙著⁽²⁾にくりかえし述べてきたように）、「肉体的な痛み苦しみ」の「痛苦」というよりは、「こころの悩み、憂い、煩^{わづ}い、沈み、怖れ」の「悩苦」にほかならず、本質的には「思うようにしたいと思い、思うようにしようとしても、どうしても思うようにはならないありかた」をさす。しかもそのようなありかたをとりわけヒトは「思うようにはならないと知りながら、なんとか思うようにしたいと思

う」という、その「思い」そのものの自己矛盾に「苦」は根ざしており、そのような「思い」の自己否定が「苦」を導き入れている。

なお以上に記した「思い」は或る場合は「欲望」として、また別の場合は「執著」としてあらわれたり動いたり押したり暴れたりしてヒトのおそらく全生涯にわたり宿りとどまりつづける。

2

「生・老・病・死」の四つの語のなかでおそらく最も問題の多い「生」について、その初歩から考えてみる。

「生」という字（漢字）は、まず土があつてその土から草や木の若芽がはえてたさまを型どってつくられ、中国音は shēng、日本では（他の漢字と同じく二種以上の音があり）⁽³⁾ 漢音のセイ、呉音のショウを適宜読み分ける。「生」の語義は①うまれる、うまれでる、あらわれる、うむ、はえる、②いきる、いかす、いきもの、いのち、という、含意のやや異なる二種がある。（そのほか辞典類には、③うまれたまま、なま、④おいる、そだつ、お

こる、なる、⑤まじりけのない(キと発音)などが掲げられる。

日本語としていえば、「生」をセイと読んで、生命、生存、人生、生活、生育、余生、生体、終生、生徒、学生、写生、生還、生産など。また必ずショウと読むのは、誕生、一生、衆生、畜生、生涯など。

また文例としては、『論語』(先進第十二)のなかの最もよく知られる句、

(子)曰わく 未だ生を知らず 焉んぞ死を知らん

があげられ、この「生」はセイと読み、ほぼ右の語義②の意味と解されている。すなわち「いきる、いきていゝる、いのち」であり、中国学の碩学として聞こえた故吉川幸次郎は「われわれの感覚に触れる生前のこと」との訳を示す。

この句はもと「顔淵死す」で始まる句が四条もつづいた直後にあり、季路すなわち子路が問ひ孔子が答えるというつぎの条文の末尾を締め括る。

季路 鬼神に事えんことを問う

子曰わく 未だ人に事うる能わず 焉んぞ鬼に事えん

敢えて 死を問う
曰わく 未だ生を知らず 焉んぞ死を知らんと「死・生」が対応する。

『論語』からもう一文を引用する(衛霊公第十五)、子曰わく 志士仁人は 生を求めて仁を害すること無く 身を殺して以て仁を成すこと有り

この文も「求生」と「殺身」とが対比されており、「生」を「いきる、いのち、生命」という右の語義②が妥当しよう。

わたくしが旧制中学の漢文の時間に学習した「生」は、また今日広く「死生観」の語に使われ、臓器移植に関連しての「生と死」のテーマにとりあげられる「生」は、右の「いきっている」の②にはほぼ決定されている。現に卑近なわがこととしての故であろう。

*

ところがたとえば発生をハッセイと読み誕生をタンジヨウと発音するように、音が二種に使い分けられ、しかもこの両語ともに「うまれる」の語義①に属する場合、あるいはたとえば人生がジンセイでその一生がイッシヨウ

の例のように、発音が別で両語ともに「いきる」の語義②に属すケースもあって、これ以外にもこのような用例は数多くあり、それらを見くらべてみれば、音の別と語義の異とのつながりを求めても到底得られないであろうし、そのようには語ないし字そのものが伝統的にそうな

つてはいない。日本語として「生」には二種の音があり二種の語義があるとはいかないようがなく、一義的な裁断は受けつけない、というべきであろう。

なお「いきる」に關係の深い「生存」については後述する。

*

仏典の用例を述べる。

仏典は、なかでも釈尊をはじめとするブツダのことは伝えるテキストとしての經典は、すべて呉音によって読み発音する。

「生」はつねにショウと音読し、しかもその語義は右の二種の①「うまれる」にはば限定される。語義が①のみという理由はきわめて簡単明瞭、すなわち更めていうまでもなく、仏典とりわけ経はすべてインドでつくられ伝

えられて漢語はその訳語として当てられたにすぎないから、当然、インドの原語が探究されなければならぬ。「生」についていえば、その原語は(サンスクリット語もパリー語も同じく)動詞の語原がジャン(√jñ)であり、それは「うまれる」を意味する(「いきる」の含意は皆無に等しい)。このジャンという動詞から名詞のジャーティ(√jñ)がつくられて、たとえば本稿のテーマの「生老病死」の四語の併列などに登場する。

なおこの「うまれ、誕生」を意味するジャーティの語は、その語形のまま中世を経て現代のヒンディー語にも流用され、そのさいには、本稿の最初にも記したインド社会固有のカースト制度そのものをさす。「うまれ」が「血統・種姓」に直結するからである。カースト(caste)という英語は元来ポルトガル語のカスタ(casta)にもとづき、それはさらにラテン語のカストウム(castum, casto、意味はpure, unmixed race)にまで遡る。さらにカスター・カーストのインド語としてはこのジャーティのほか、ヴァアルナ(varna)が相当するという用例も知られ、この語は「いろ」をあらわす。

それは、インド・アーリア人が征服者として皮膚のいろにより先住民との別を特徴つけた名残りとして解説される。

付言すれば、だれもが納得するように、「生まれる」という語は「うむ」の語の過去（受動）分詞形であり（英語の born もドイツ語の geboren も同じ）、動詞ジャンの過去分詞ジャータ (jatā) が一種の形容詞に転じ、それを女性名詞化してジャーティの語になる。

あるいは右のジャータに接尾辞のカ (ka) を付した名詞のジャータカ (jataka) は「誕生、発生」をあらわし、それはその由って来た過去（世）につながっているとのインド思想に結合して、とくに釈尊の前世物語として語りつがれ、ジャータカ（本生物語というジャンル（ないしグループ）が格別とも思われるほどに拡大創出されて一文学体系を形成し伝承される。

なお死後の未来世に輪廻し転生するという、仏教にも含まれるインド思想の強靱さは、豊穡多産なその土着文化に根があるのではないかと、かつてわたくしはインドの地で考え今も変わらない。

一見して判然とするように、初期仏教後代に特有な或る種の固定化がこの文には窺われ、カンダやアーヤタナという仏教術語が形成され、のちに「陰（または蘊）」と「入（または処）」との訳語が当てられる。このことについての言及はここには控える。

3

「生まれること」は「いのちをもつこと」であり「生命を有すること」であり、「生命をもつもの」は「生物」である。

先に引用した経文のなかのサッタ (satta) Ⅱサンスクリット語のサットヴァ (satva) は、「ある」という意味の原語アス (as) の現在分詞形のサト (sat) に抽象名詞化する接尾辞のトヴァ (tva) またタ (ta) を付したと語形成立が説明され、語義は「存在」がふさわしい。ただしこの語には、たんなる存在ではなくて「生命の存在」とのニュアンスが加わっていると考えられて、漢訳は長いあいだ「衆生」の語が当てられ、のち玄奘は「感情や意識を有するもの」と解して「有情」という新訳を

これまでの「生まれる」という仮名表記は、右の説明を経たうえで、以下には「生まれる」と漢字まじりに換える。

初期經典に「生まれること」を解説する定型文があり、それは『相応部』と『中部』との二つのパーリ文「ニカーヤ（部）」に引用される。すなわち、

それぞれの衆生の部類においてそれぞれの衆生が生まれること (ya tesam tesam sattanam tamhi tamhi sattaniyaye jati) ・出生 (sajati) ・出産 (okanti) ・誕生 (abhinibbatti) ・もろもろの構成要素の出現 (khandhanam patubhava) ・もろもろの器官の完備すること (avatannam patibhava) ・これが「生まれること (jati)」といわれる。

なおこれに対応する漢訳は『雜阿含經』には「若彼彼衆生、彼彼身、種類一生、超越和合出生、得陰得界得入處得命根、是名為生」とあり、『中部』相当の『增壹阿含經』にはたんに「等具出處受諸有、得五陰受諸人、是謂為生」という。

提唱する。現代の英訳では living being、ドイツ語訳は Lebewesen が用いられて久しい。

地球上の生物に関する学である生物学は、歴史も古く伝統も長く観察は多岐龐大綿密精緻を極めて、他の諸学との関連は広く深い。たとえばかつてのアリストテレス『自然学』(Physica) において生物学の位置は大きく重く、それは後代のカント『自然地理学』(Die physische Geographie) にも及ぶ。現今は生物学そのものがさらに細分化され、同時に医学・生理学との連繋が相互に緊密化し、遺伝子 (DNA) の発見とその応用が、あるいは生殖にかかわる諸項が、騒しいほどに喧伝される。

「生まれる」は「生む」とつながり、その「生む・生まれる・生む」という連鎖が生物学の基本的研究の一つであることは、ことさら吹聴するまでもない。

*

漢字に「スル」(文語は「ス」、またそれらの濁音)をつけるという日本語の動詞造語法(の一種)があり、いわゆるヤマトコトバ風の「生まれる」は転じて「生ずる」となる。この場合は必ずシヨウと発音する。

「生ずる」のは生物に限定されず、一般にモノにもコトにも現に展開されている。

広くモノやコトが「生ずる」というサンスクリット語は、それらの動詞を語根とあげると、janのほかに、ud-pad, ud-i, pra-bhuなどが仏典にしばしば用いられる。(煩を畏れて用例などは省く)。

なお「縁起」という依存関係性を基盤に置く仏教思想にもとづいて、右の「生ずる」には「ともに」を意味する接頭辞のサム(sam-)を付して、たとえば samutpada (samupada), samudayaなどの「(ともに) 起こる、集まり生ずる」という術語が重要視されることも留意されよう。

*

「生ずる」という運動をいったん停止して「生じている」という存在(状態⁽¹⁴⁾)に、さらに「生きる」へ移せば、先の2の前半に記した「いきる」が舞台上に舞う。それは「生存」と換言されよう。

「生存」は仏教諸説の一つの十二支縁起(十二因縁)説のなかにバヴァ(bhava)という一支を占める。漢訳はす

べて「有」を当てる。

バヴァは動詞ブー(bhu)の名詞形であり、ブーの語は「ある」「(在る)」「(なる)」「(成る)との両義に跨る⁽¹⁵⁾。またブーの名詞形は(とくにサンスクリット語では)バヴァ(bhava)が一般的であり「存在」そのもの(モノもコトも)をあらわす。

バヴァは「生命の存在」すなわち「生存」であり、初期経典の『相應部』はつぎのように説明する。

欲にとらわれた生存(kamabhava 欲有)、(欲を離れ)物質のある境地における生存(tupabhava 色有)、物質のない境地における生存(arupabhava 無色有)、これが「生存(bhava)」といわれる。

中期仏教以降に部派の筆頭を占める説一切有部は十二支のなかの「有」を「愛」と「取」とともに「現在世の三つの因」とし、その三因がそれにつづく「生」と「老死」との「未来世の二果」にかかわると説いて、この「有」は現在世の生存にほぼ近似する。

このバヴァの語は英語のライフ(life)やドイツ語のレーベン(leben)とは語原も用法も異なる。バヴァの

英訳は becoming、ドイツ語訳は das Werden が多く、これらは上述した日本語の「生存」よりはるかに無機的で評されよう。

なおバーヴァ(正確には「つくられたもの」[samveta 有為、諸現象])のありかた(Udassana, lakkhana 相)は、初期仏教から中期の大乗初めまでは「生と住と滅」の三種、紀元四世紀半ば以降の後期仏教あたりから「異」を挿んで四種とされる。右のなかの「住」とは「とどまる」(動詞の語根は sth)。ただし仏教思想に一貫する「無常」はもともと運動停止を許さず、住は(生も滅もともに)刹那(瞬間)のみで消え去ると説かれる⁽¹⁷⁾。

*

右に生物学の語をあげたので、一つだけ私見を付加したい。

生物学から最も遠く離れているわたくしでさえも、現在いたるところに満ち溢れ出て浸透している生物学関係の諸情報に触れざるを得ず、向こうからいわば押し寄せてくるそのほんの入口にわずかばかり振り向いて、判りやすく噛み砕いた入門書の類に目を通したり耳に入

たりするたびに、何よりもまずその最初に躓いてしまうのは、或る一つの語、すなわち「進化」という語のあまりにも独断専横的な支配である。「進化」の語を挿入させればあたかもいつさいが解決され納得されるかのごとき風潮に生物学は安住しており、「進化」の濫用はすでに処置なしに映る。

「進化」(evolution)の語を用いた哲学者にわたくしの知るかぎりではベルクソンがいて、かれの哲学思维にはかなり仏教思想に類似する節々が窺える。ベルクソンは固定し実体化したそれまでのあらゆる考えの基盤そのものに背いて、ことごとく流動化させようとし、その結果の不確定性にむしろ積極的であり、流れて行く先は流れるままに任せだが、偶然に突発するモノやコトの扱いに苦慮した。哲学体系は完成されず、その論証が一部は反復饒舌で一部は飛躍との欠陥も指摘されようが、それはかれのカトリシズムのドグマによる哲学視限の限定や制約が理由の一つと推察される⁽¹⁸⁾。

いずれにせよ、進化とは何か。生物学という進化はどうやら進歩発展を含んだ変化の意らしいが、いったい進

化と変化とは異なるのか、どのように異なるのか。諸データにもとづくという因果律まがいのルートを經由した結末は現在に集約されて「現在バンザイ」を謳う一種のオペティズムがはたしてどの範囲にまで機能するのかわ、有効なのであろうか。

その結論は生物の進化の極にヒトを置き「万物の霊長 (Primate)」と崇め立てる、その指定はあまりにも驕傲で高慢な錯覚ではないのかと、自然征服思想になじめないわたくしの眩きは容易には消え難い。

以上で、「生」に関する詳述を閉じる。

4

標題の「生老病死」のうち、「老」と「死」とについて初期經典の『相應部』の掲げる説明を引用する。

それぞれの衆生の部類においてそれぞれの衆生が老いること (jara) ・老衰すること (jirana) ・老いほれること (khandhica) ・白髪になること (palica) ・皮膚が皺だらけになること (valitacata) ・寿命が類れること (ayuno samphani) ・もろもろの器官が熟れ切つてしま

うこと (indriyānam paripaka) ・これが「老いること (jara)」といわれる。

それぞれの衆生がそれぞれの衆生の部類から没落すること (cuticavanata) ・逝去すること (bhedā) ・身体が破壊すること (antaradhana) ・消失すること (macu) ・死滅すること (marana) ・臨終をなすこと (kalakiriya) ・もろもろの構成要素が分散すること (khandhanam bheda) ・遺骸を処理すること (kalebura) ・これが「死ぬこと (maraṇa)」といわれる。

*

以上にあげた「生」「老死」は、初期仏教に始まり大乘仏教にも流れ込む十二支縁起説に項目として活躍し、右の引用もその個所に付随して提示される。

「病」(roga, vyādhi) はその説には見えず、格別に定義され解説されることがない(らしい)うえに、もともと「病」とは何かを規定することは古今東西にわたりおそらく不可能であろう。いちおうは「生理状態の異常」と説明しても、正常と異常との境界は実は任意としかいえない。しかもとりわけヒトには「からだ」のほか

に「こころ」があり、こころは決して一義的に解釈されない。心理もあり精神もあり魂などもありさらにそれ以上の領域が「こころ」には含まれている。「病」に「氣」の語を加えて「病氣」といえば、ますます不定という以外あるまいとも思われる。

*

病に対してヒトは医(と薬)をもって当たり、また宗教もきわめて大きな役割を果たした。それはヒトが知をもったその当初からつねにつづいているといえよう。

歴史的には多く、医は病の生理状態に、宗教はその心理状態にかかわり、ともに病の診断や治療や看護に、対応や回復や慰安に、鼓舞や激励や救援に、直し癒し護り授け救う奉仕に尽くした。

明らかにヒトは本来、不完全であり、限界があり、欠陥をもつ。元来みずからの生まれをみずから選択することと決定することもできないという万人に自明な、ヒト(生物)には必然的な制約限定によって、ヒトは苦の本来を知り、そのようにして生まれたなま身の自分が(つぎに)出あう苦のあらわれの一つが病なのであろうが、

病がそのまま死ではなく、病が死にいたらせるのでもない。死は死としてあり、苦のあらわれの一つとしてある。もしも死の真の因を問訊して行けば、生(生まれると生きるとの両義)そのものに帰すと、わたくしは考える。⁽²⁰⁾(死因に病名を記すのは、いうまでもなく、いちおう現状の特定の社会通念として採用されているにすぎない。また「医ではなく病者が病を克復する」という名言が医にある)。

*

仏教とは何かの問いに対して、完全な答えはおそらく不可能といえようが、通常は仏法僧の三宝を立てて説明される。

その三宝整備を仏教の正常と見なすかぎり、仏教はインドにおいて一二〇三年にイスラームによる僧宝(出家修行者の集団)の徹底破壊とともに消滅し、いわば死を迎えたことになる。そのことからあるいはインドにおいては仏教は生老病死の四つをすべて経過したとも評されよう。もとより仏教教団としての組織がなくなり、教団への出家者加入が消えたからといって、仏宝と法宝と

に帰依し信奉し守護し尊重し継承する伝統は、インド社会に減少や衰退が不可避とはいえず、決して絶無とはならず、却って一部は強く根を張っている。

さらには、仏教が仏法僧の三宝をそろえて（一部には僧宝のありかたに変貌がある）、インド以外の東アジアや南アジアにすでに長い歴史を刻み文化を伝え育て養い産み満たして来て今日にいたり、さらに全世界に伝播拡大しようとしているという史実と現実とは、更めて特筆する要はない。

*

この稿の1に、苦には「痛苦」と「悩苦」との二種があり、仏教のテーマは「悩苦」を中心とすると記した。このことはさらに、すでに初期仏教以来、生老病死の四苦に、怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五蘊盛苦の四苦を付け加えて八苦を説き、後者がすべて悩苦であるところからも、充分に確かめられよう。なお英語とドイツ語では、痛苦は pain, Schmerz、悩苦は suffering, Leiden の訳が適応する。

それに関して、インド土着の文化には苦を痛苦として

特別に解釈し説明する用例があり、シヴァ派のテキスト類に見られるという研究が進められ、とくに原実「死苦⁽²¹⁾」に論証された。

それによれば、身体 of 老と病と死の三つは生理的な痛みである痛苦を発信し、その痛苦によってヒトはみずから老病死を知り体験する。したがって老苦と病苦と死苦の三苦はまさに痛苦にほかならない。同様に、ヒトは出生すなわち母胎からの出胎時に生苦という痛苦を味わう。胎児は逆さにされてあまりにも狭い産道にきつく締めつけられ辛うじて通過し出胎する、そのさいの胎児の受ける激痛が生苦であり、その痛苦のために胎児は無知に帰すという。（産む母のいわゆる陣痛は問われない）。

逆にいえば、産道通過がなければ生苦はないことになる。長期間、胎内で獲得し完成し備貯した意識も智慧もそのままに保たれて、産道を経ずにたとえば脇の下から直接に誕生する、それがヒンドウの最高神インドラ（仏教にとりいれられて帝釈天）であり、インドラ神は絶大な偉業を満たし最後生であって輪廻はないと最高の賞賛を浴びる。

残されている。

註

- (1) この点に関しては拙稿「仏教学とキリスト教学」（拙著『仏教と西洋思想 比較思想論集3』春秋社、一九八二年）などに論述した。
- (2) とくに拙著『初期仏教の思想』中巻（レグルス文庫211、第三文明社、一九九五年）の「本論 第三章 苦」を参照。
- (3) たとえば「天」の字のように一音のみの例もある。そのほか日本語の読みとして固定した訓がある。なお上掲の中国音は時代や地域などによる差異が著しくまた四声や韻も付随する。ここには現代の北京音を記す（藤堂明保編『学研漢和大事典』一九七八年、八五一ページの「生」）。
- (4) 吉川幸次郎『論語』下（朝日新聞社、一九六三年）二六ページ。なお付言するまでもなく「生前」という語は現在の日常会話に多用されるように「生きているあいだ、死なないうち」というのであって、「生まれる以前」を含意することは決してないといつてよい。
- (5) 経とは何かを厳密に定義することは実のところ不可能といわざるを得ない。しかしそれではあまりにも独善的であり困惑してしまうところから、多くは「経と律と論」の三種に区分して、「経」を「ブッダのことば」と

このインド伝承は釈尊の誕生説話に流入して、母マヤー夫人の右脇からの釈尊誕生という仏誕生説話がつくられる。それはサンスクリット語による仏伝類に、たとえば『マハーヴァストウ』（Mahāvastu）・『フリタヴィスタラ』（Lalitavistara）・『ブッダチャリタ』（Buddhacarita 漢訳『仏所行讃』）という完結した文学作品に美化されて結実し、サンスクリット文にもとづいて漢訳された仏伝を含むほぼすべての文献に語られ、そのような仏誕を示す摩耶夫人像彫刻まで数多く製作され、東アジア全体に広くよく知られる。

この類いの超人誕生説話はたとえばシェークスピアの『マクベス』に、あるいは（マルティン・ブーバー『われと汝』によれば）ユダヤ教の神話伝承にも登場し、また一部にやや粉飾をまじえつつ（ローマの）シーザーの帝王切開による誕生伝にまで投影している、と古代世界の各所に播布された跡がある。

ただしこのように生苦を痛苦と解し、逆に痛苦のない出生というヒンドウ伝説が、南伝仏教すなわちパーリ文献にも紛れ込んでいるか否かは、なお不明不詳のまま

解する。ただしこの扱いはさらに検討を加えて行くと、結局は不明に陥り堂々巡りをくりかえすことになる。このことについての拙稿「経とは何か」(上掲の拙著)および拙稿「初期仏教の文献資料研究雑録——三蔵について——」(大倉山文化会議研究年報5)一九九四年などを参照。

- (6) SN. XII, 2, 5. PTS. vol. II, p. 3.
- (7) MN. No. 9. PTS. vol. I, p. 50.
- (8) 邦訳は中村元『原始仏教の思想Ⅱ』(中村元選集〔決定版〕16 春秋社、一九九四年)四四八ページ。
- (9) 『雜阿含經』第十二卷(二九八)(大正、二卷 八五ページ中)。
- (10) 『增壹阿含經』第四十六卷(五)(大正、二卷、七九七ページ下)。
- (11) 「処」(三本による)の字を「大正」は「家」とする。
- (12) 拙訳『自然地理学』(『カント全集』第15巻、理想社、一九六〇年)のなかで生物学は二四一―三一九ページ、その訳註のナンバーは1―354にも達する。
- (13) 口語の「スル→ズル」の場合、おそらく新しい用例と思われるが、「ズル」ではなくて、「ジル」という例をしばしば見たり聞いたりする。すなわち「生ずる」を「生じる」という。とりわけ漢字が一字(語)の場合、その音が「生」のように「オー」音で終わる字(語)、たとえば、応、興、講、投、動、奉など、また「ン」で終わる字(語)、たとえば感、信、禁、断、按、任などにそ

の例は多い。だがわたくしはどの場合も「ズル」で統一してきたし、今後もそれをつづけたい。

- (14) 運動をめぐる諸問題、また運動と存在とのテーマは最新の拙稿「運動は連続か非連続か」(『哲学・思想論叢』16、筑波大学哲学・思想学会、一九九八年)に試論を綴った。
- (15) プーの語の両義については前掲の拙稿においてもとくに言及した。
- (16) SN. XII, 2, 6. vol. II, p. 3. 訳は中村、上掲、四五〇ページ、漢訳については、同書、四五二ページの註(6)を参照。
- (17) 有為のパーヴァに関し、住は生にではなくて住住に、その住住は本住に根拠がある。『中論』第七章、『俱舍論』第五巻など参照。
- (18) 拙稿「ベルクソンと仏教思想について」(拙著『東と西の思想 比較思想論集2』春秋社、一九八二年)参照。
- (19) SN. XII, 2, 4. vol. II, pp. 2-3. 中村訳は上掲、四四三―四四四ページ、またその註(1)を参照。
- (20) 拙稿「生死一如―私の生死観」(昭和六十二年度日本大学通信教育部公開講座「生と死を考える」)参照。
- (21) 原実「生苦」(『玉城博士還暦記念論集 仏の研究』春秋社、一九七七年)、同「仏誕伝説の背景」(『駒沢大学仏教学部論集』第二十六号 一九九五年)など。また原実と三枝との対談「インド思想と仏教」(三枝『仏教の思

想 三枝充恵対談集』春秋社、一九八六年)など参照。

(さいくさ みつよし・筑波大学名誉教授)

(本稿は一九九七年十月八日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆し修整していただいたものです)